

2015年7月14日(火)～7月26日(日)

8月4日(火)～8月30日(日)

南館2階第15陳列室

16世紀の中頃ポルトガル人宣教師がカトリックの布教のために渡来し、日本からヨーロッパへの漆器の輸出が始まる。17世紀の中頃までは主にキリスト教の祭具、筆筒や櫃などの調度が蒔絵や螺鈿を用いて京都で製作され、ポルトガル、スペイン、イギリスの貿易船によって輸出された。西洋の形式の調度に日本の文様を日本の技法によって表現した漆器家具は、フランスをはじめ、ヨーロッパ各地の王侯貴族のシノワズリー趣味のなかで好まれた。徳川幕府によりキリスト教の禁教、鎖国が行われた17世紀の後半以後も、オランダ東インド会社の長崎貿易や中国を経由して、日本漆器が輸出され、またヨーロッパでは日本漆器を模した塗装が流行、さらに流行遅れになった漆器家具の一部を用いて新たな家具を仕立てることも行われた。

1 花樹飛鳥蒔絵螺鈿厨子(ずし) 桃山時代 16世紀

聖母マリア像を納めるために作られた厨子。扉の内外と厨子の側面の板はそれぞれ、聖龕(2)と同じく黒漆塗りに仕上げられ、幾何学文の縁取りした内部を蒔絵螺鈿の草花文で充填する。厨子内部の黒い塗装と金による装飾は日本製の漆による塗装ではない。また扉の内部のアーチと柱、基台部分の彫刻による装飾は日本ではなく、16世紀に南インドを支配していたムガル帝国で作られたものとされ、日本からヨーロッパに至る国で作られた部材が組み合わされヨーロッパで完成されたものと考えられることができる。

2 花鳥蒔花鳥蒔絵螺鈿聖龕(せいがん) 桃山時代 16世紀

観音開きの扉をつけた木製の厨子。聖母子を描いた銅版油彩画が納められている。このような器物を日本では聖龕(せいがん)と呼んでいる。小型厨子は貴族などが私的な礼拝に用いており、京都で制作され輸出され、ヨーロッパで描かれた聖画が納められた。本器は黒漆塗、蒔絵螺鈿の技法を用いて日本でヨーロッパ向けの漆器として製作された。扉の表と裏は幾何学文で縁取りを施し、その内部は花、鳥、樹木などでぎっしり埋め尽くされ、日本的装飾とは異なるイメージをかもしだしている。

3 IHS 紋螺鈿蒔絵書見台 桃山時代 16世紀

日本に來訪したポルトガル人やスペイン人宣教師周辺の注文によって京都で製作され、ヨーロッパに輸出された漆器の一つに、カトリック教会の聖堂で、聖書などを載せて使用する書見台がある。

一木を削りだして製作したもので、漆を塗り蒔絵や螺鈿で幾何文や花鳥文などを表す。書見台の面の中央にはイエズス会の紋章でもあるイエズスキリストを表す IHS のモノグラムが表されていることから、キリスト教が厳しく弾圧される以前に製作されたと推測される。

4 花樹鳥獸描金鏡入厨子 桃山時代 16 世紀

ポルトガル人が訪れたインドからマラッカ海峡を経て、中国に至る各地で、日本からの輸出漆器と同様、ヨーロッパの宣教師たちの注文によって製作された手工芸品が作られた。これらをインド・ポルトガル様式の作品と呼ぶことがある。各地で製作されたものについて詳細は明らかではないが、本器のように漆は使われていないが、日本製の漆器の影響を受けて模倣した作品も多い。厨子は聖画ばかりではなく鏡台としても使われた。

5 花樹鳥獸蒔絵螺鈿洋櫃（ようびつ）桃山時代 16 世紀

長方形の箱に蒲鉾形の蓋をつけ、背面を蝶番でとめた櫃を、日本では洋櫃と呼び習わしている。もともとポルトガル、スペインにあったバルゲーニョという形の櫃になったものと考えられる。本器の蒲鉾形の蓋にはヨーロッパの櫃に付けられている金属製の帯を表す飾りが付けられている。各区画はさらに幾何学文の枠でくくられ、そのなかに花樹鳥獸が蒔絵螺鈿で表されている。

6 青海波螺鈿蒔絵櫃 桃山時代 16 世紀

青海波風の文様を器物に充填する装飾は桃山時代の輸出漆器にしばしば見られる。これはインドなどポルトガルの植民地で行われた貝細工の影響を受けたもので、こうした離れた植民地で見られる類似した作風をインド・ポルトガル様式とよんでいる。

7 花樹蒔絵螺鈿徳利（とっくり） 桃山時代 16 世紀

蒔絵、螺鈿で装飾を施した木製漆塗りの角徳利（かくどっくり）。器形は日本の伝統的なものとは異なり、注文者であるヨーロッパ人の意向にそったものである。モチーフである草花は和様だが、枠取りの中に余白をのこさず模様を充填する手法はヨーロッパ人の好みを反映している。この器形は葡萄酒を入れる容器で、後に景德鎮、有田などで焼かれた陶磁器もある。

8 花樹蒔絵螺鈿洋櫃 桃山時代 16 世紀

9 花樹蒔絵螺鈿洋櫃 桃山時代 16 世紀

10 萩蒔絵螺鈿小洋櫃 桃山時代 16 世紀

11 菱繫文鮫皮（さめがわ）貼蒔絵螺鈿洋櫃 江戸時代 17 世紀

蒔絵、螺鈿ばかりでなく、鮫皮の張られた櫃。鮫皮とされているが、実際には東南アジア産のエイの皮が貼り付けられている。エイの皮は朱印船貿易によって桃山時代から輸入されており、鎖国後はオランダ東インド会社を經由して輸入が続き、刀の鞘などの装飾にも用いられた。

12 桜花丸紋菊桔梗蒔絵螺鈿小洋櫃 江戸時代 17 世紀

13 紋章付山水花鳥蒔絵盤 江戸時代 17 世紀

口縁部に樓閣山水、四季の草花、蝶、鳥などを高蒔絵で表す。中央にはオランダ東インド会社と関わりの深いアムステルアムの貿易商、ヒンローペン (Hinlopen) 家の紋章が蒔絵で表されている。同じ紋章のある富士山など東海道を蒔絵した皿が国立歴史民俗博物館に所蔵されており、また東インド会社関係の一族の紋章を付けた他の皿が数枚知られている。日本から家紋を入れた蒔絵皿が陶磁器と同様作られ、江戸時代の中期、十七世紀から十八世紀にかけて作られていた一例である。

14 清水寺蒔絵盤 江戸時代 17 世紀

木製黒漆塗の盤。唐草模様の縁取りがあり、見込みには清水寺と音羽の滝の景観を蒔絵で表している。本器とほぼ同一意匠の受け皿と、鴨川の景観を蒔絵した水注のセットがアメリカのピーボディ・エセックス博物館にあり、本器もまた水注と一具で作られたものであろう。形態から 1700 年前後の作と考えられる。

15 草花蒔絵楯（たて） 江戸時代 17 世紀

ヨーロッパ向けに日本で製作された楯。漆皮製で総体に黒漆を塗り中央に鳳凰紋、外周に唐草を、そして三方に草花が蒔絵で表されている。オランダのハーグにある国立公文書館の「日本商館文書」には十七世紀の中頃から十八世紀の初頭にかけて、インドのベンガルで作られた皮製の楯を日本に送り、蒔絵を施し、再びベンガルへ輸出し、さらにヨーロッパへ輸出したことが記録されており、本器もその作例の一つと考えることができる

16 花鳥御所車蒔絵螺鈿書筆筥 桃山時代 16 世紀

扉のついた筆筥。ヨーロッパで脚をつけ、扉を固定する細工を施し、書き物机として用いられたことから、書筆筥といわれる。扉の表、天板はカトーシェとよばれる枠で区画され、その内側には蒔絵螺鈿で草花に牛車を表している。扉を開けると内部にはたくさんの抽斗が納められており、それらはびっしりと螺鈿蒔絵の幾何学文で装飾される。扉の裏は朝顔など蔓草に鼠が蒔絵で表される。

17 山水蒔絵変わり箱 江戸時代 17 世紀

18 山水蒔絵葉巻（はまき）立て 江戸時代末期～明治初期 19 世紀

塔のような形をした器物。屋根の上の紐を回すと、側面の扉が開き、扉の裏側に打たれた金具に挿して収納してある葉巻を取ることができるという葉巻立て。漆が塗られており、蒔絵で虫、水辺の人物、草花などが表されている。江戸時代の末期から明治初期にかけて製作され、ヨーロッパに輸出された形式で、明治6年（1873）ウィーンで開催された万国博覧会の出品物にも類品が含まれる。

19 夕顔 蒔絵 天目 桃山時代 16 世紀

木製の天目形の椀。黒漆塗りに夕顔の花、葉、蔓を金平蒔絵で表す。葉や花の一部には絵梨地、針描、付描が用いられる。平蒔絵を用いて、秋草は樹木を器物に蒔絵する手法は、戦国武将の求めに応じて多くの器物が作られた桃山時代に流行した。この様式の蒔絵は、豊臣秀吉の菩提を弔うために北の政所が建立した高台寺の建築装飾や、同寺に伝来する秀吉ゆかりの器物の特色の一つであることから、後に数寄者によって「高台寺蒔絵（こうだいじまきえ）」とよばれるようになった。

20 御簾夕顔桐紋蒔絵天目台 桃山時代 16 世紀

21 御簾桐紋蒔絵天目台 桃山時代 16 世紀

22 山水蒔絵螺鈿重箱 桃山時代 16-17 世紀

23 南蛮人蒔絵色紙箱 桃山時代 16-17 世紀

大阪府教育委員会

16世紀の半ば以降、来航したポルトガル、スペイン人たちを南蛮人といい、ヨーロッパ向けに輸出された漆器と、ヨーロッパ人や、彼らがもたらした器物、彼らの好んだ幾何学文などを意匠化した漆器はともに南蛮漆器とよび珍重してきました。この箱は黒漆塗りで、帽子を手にしたカピタン・モールと、傘と長煙管を手にした二人の従者が薄肉の高蒔絵で表されています。また箱の蓋裏には梅花と撫子が散らされています。